

国際ワークショップ開催報告

奥山倫明
OKUYAMA Michiaki

アジア・ヨーロッパ・ワークショップ
In Search of Humanized Globalization:
The Contribution of Spirituality-Based Social
Movements

2004年4月27日より30日まで、南山大学、アジア欧州財団 Asia-Europe Foundation (シンガポール)、ルアーヴル大学 Le Havre University (フランス) を主催者とし、大幸財団他のご後援により、日本学術振興会「国際研究集会」プログラム、アジア-ヨーロッパ・ワークショップ「人間のためのグローバリゼーションを求めて-精神文化に依拠した社会運動の貢献-」が、名古屋ガーデンパレスを会場として開催された。南山大学内で教員・職員合同により組織された実行委員会(研究所総合委員会と学長室を中心とする)をはじめ、内外の多くの方々のご協力をいただき無事に終了できたことは、共同企画者として大きな喜びであり、感謝の気持ちを込めて簡単にご報告申し上げたい。

本ワークショップのそもそもの発案はルアーヴル大学のダーウィス・クトリ Darwis Khudori 氏によるもので、2003年2月より私もその企画に賛同し協力することとなった。私たちはその後、ヨーロッパとアジアからさらに3名の協力者を招いて Steering Committee を組織し、ワークショップの準備を進めた。ここに加わった3名は、Bernadette Andreosso O'Callaghan (University of Limerick, Ireland), Miriam Coronel Ferrer (University of Philippines), Parichart Suwanbubbha (Mahidol University, Thailand) の各氏であり、この5名がワークショップの形式と内容の全般を決定するために、数ヶ月間、電子メールを通じて討議を重ねることとなった。

日本において宗教は、個人的な心の問題と受け取られがちであるが、国外においては社会的に人々の連帯を妨げるマイナスの働きをす



ることもあれば、また逆にその連帯を取り持つプラスの働きをすることもある。世界のさまざまな地域に、宗教やその他の精神文化を背景にして、グローバリゼーションの悪影響から地域社会を守り、その改善のために活動をしている実践家たちがいる。彼らに加え、そうした精神文化について考察している研究者が一同に会し、それぞれの経験を共有し新たな連帯の可能性について模索する場として、本ワークショップの構想が打ち立てられるに至った。

この企画は、日本学術振興会からのご支援に加え、アジア欧州財団の知的交流プログラムのご協力も得られることに決定した。同財団 Cultures & Civilisations Dialogue Programme の Bertrand Fort (Director), Sohni Kaur (Project Assistant) の両氏は、同財団の過去のプログラムでの諸経験を踏まえ、本ワークショップの成功に向け企画段階から大きな支援をしてくださった。Steering Committee と財団の担当者の両名との合議により、私たちはアジアとヨーロッパから均等に招聘者を集めることに努め、結果的に国外 22 カ国から 46 名の参加者を迎えることとなった。そこには研

究者と実践家の双方が含まれ、また男女もほぼ均等に招くことができたこと（別表参照）。

また本ワークショップにふさわしいゲストとして、アジアとヨーロッパの双方から基調講演者もお招きすることとした。人選には紆余曲折があったが、最終的に、タイ仏教社会活動家スラク・シワラク Sulak Sivaraksa 氏、ロンドンスクール・オブ・エコノミクス名誉教授アイリーン・バーカー Eileen Barker 氏、元世界キリスト教協議会・超教派開発基金事務局長ヴォルフガング・シュミット Wolfgang R. Schmidt 氏と、作家・池澤夏樹氏にご講演をお願いすることとなった。なおインドネシア前大統領ワヒド氏も、直前まで参加をお考えくださっていたが、国内情勢のために断念されることになった。

招聘者を含めて約 100 人の参加者が議論を行うために、4 日間の会期はもちろん充分ではない。しかしながら本ワークショップは、グローバリゼーションの是正のために世界各地で研究・実践を行っている方々の、新たなネットワークづくりの一つの起点となりえたのではなかろうか。本ワークショップ開催に向け尽力された実行委員会の諸氏とともに、本学がそう

した国際貢献にささやかな寄与をなしたことを喜び合うこととしたい（なお本ワークショップを踏まえ、6月6日付け『中日新聞』に、寄稿した文章があるので再録しておく）。

招聘者一覧

関連国名のアルファベット順による。なお国名は、出身国と活動国が順不同で列挙されている。

アジア

Hajah Sainah binte Haji Saim (Brunei)
Chen Meilin (China)
Li Hanying (China)
Tam Wai-Lun (China)
William Kwan Hwie Liong (Indonesia)
Musdah Mulia (Indonesia)
Iik Arifin Mansurnoor (Indonesia/Brunei)
Darwis Khudori (Indonesia/France)
Yukio Kamino (Japan)
Masato Noda (Japan)
Yoshihide Sakurai (Japan)
Ibrahim Abu Bakar (Malaysia)
Sharifah Zaleha Syed Hassan (Malaysia)
Helen Ting (Malaysia)
Albert E. Alejo (Philippines)
Miriam Coronel Ferrer (Philippines)
Esmeralda Fortunado Sanchez (Philippines)
Theresa D/O Wilson Devasahayam (Singapore)
Tong Chee Kiong (Singapore)
Minjung Kim (South Korea)
Woosik Moon (South Korea)
Pracha Hutuanuwatr (Thailand)
Parichart Suwanbubba (Thailand)

ヨーロッパ

Markus Glatz-Schmallegger (Austria)
Isabel Yopez (Belgium)
Hilda Rømer Christensen (Denmark)*
Kaarina Kailo (Finland)
Brigitte Bleuzen (France)
Lawrencia Kwark (France/South Korea)
Bernadette Andreosso O'Callaghan (France, Ireland)
Tanja Wunderlich (Germany)

Adrian Pabst (Germany/Luxembourg/U.K.)
John Lannon (Ireland)
Giovanni Balcet (Italy)
Massimiliano Andretta (Italy)
Angelina Volpe (Italy/Japan)
François Moyse (Luxembourg)
Patricia Morales (Netherlands)
Karel Steenbrink (Netherlands)
Mohamad Omar Nahas (Netherlands/Belgium)
Aasulv Lande (Norway/Sweden)
Paloma Jimena (Spain)
Ann Aldén (Sweden)
Elisabeth Gerle (Sweden)
Jane Samuels (United Kingdom)*
Kamran Mofid (United Kingdom)*

特別参加

Mayfair Yang (United States of America)

* この3名は直前に参加取り止めとなった。Mofid氏のペーパーは Peter Milward氏によって代読された

再録¹

海外ボランティアを駆り立てる想像力とは?: 宗教にも問われる国際貢献

—国際ワークショップでの議論から—

四月にイラクで起こった日本人人質事件は、イラク情勢そのものをめぐる議論に加えて、民間人の国際貢献と国家による自国民の安全確保との関係について、さまざまな議論を巻き起こした。いくつかの論壇誌の六月号を並べてみると、個人レベルでのボランティア活動自体が人質解放に有利に働いたという説明も一方ではなされているが、他方では、国内にもさまざまな形で援助を必要とする人々がいる状況で、海外に目を向けることがそれほど重要なのかと海外での NGO 活動に疑問を投げかける論者もいる。

援助を必要としている人々に対して手を差し伸べようとする自発的な意志を、自国民こそ優先すべきだと修正を迫る主張にはもっともな面

もある（「慈善はまず身内から」という言葉もある）。しかしながら国家の枠組みにとらわれたそうした思考を相対化しうる、遠くの他者に対する柔軟な想像力が、海外ボランティアの方々の姿からはかいま見えてくるのも確かだろう。

むろん、ある国の国民が国外で実践する諸活動も、かなりの程度までは、その人が帰属する国家の存在を前提となしうるものに違いない。しかしながらグローバル化の進展する今日、民間レベルでの国際貢献は、国家とは別の次元で多様な形で展開されてきているのも事実である。四月下旬に名古屋で開催された国際ワークショップ「人間のためのグローバル化を求めて—精神文化に依拠した社会運動の貢献—」（アジア欧州財団・南山大学等の共催による）が主題として取り上げたのも、アジア、ヨーロッパの各地で宗教その他の精神文化に依拠して展開されているさまざまな社会運動であった。

基調講演者の一人として参加された作家の池澤夏樹氏は、物質的、経済的価値に還元されない精神的価値の存在に触れたあと、二十世紀初頭の東北で農業技師として農民への助言、協力を無償で実践した、ある「社会運動家」を事例として取り上げられた。この運動家、宮沢賢治は、いうまでもなく詩人、童話作家として知られるが、池澤氏は賢治が熱心な仏教の信仰者であったことにも注意を喚起している。つまり賢治は、宗教者の社会貢献の一つのあり方として回顧すべき例を提示しているわけである。

現代の日本において、「宗教」は心の問題であり、したがって戦争やテロの背景になりうるなどとは、日本人としてまったく理解できないといったような語り口を耳にすることがある。実はこうした考え方は、「宗教」という概念自体が、明治期において「レリジョン」の訳語として確定していく過程を一つの背景としてい

る。そこで「宗教」として含意されるようになるのは、仏教に加えて、明治初頭に二世紀半に及ぶ禁制を解かれたキリスト教であり、それらは、その後公認される教派神道諸教団等とともに、国家祭祀（すなわち神社神道）と抵触しない限りにおいて、明治憲法下において個人の信仰として許容されることになる。

こうした先入見をはずしてみれば、宗教がさまざまな形で社会的な活動をなすことも理解しがたいとはいえなくなる。戦争やテロといった汚点を歴史の上に残してきたことも忘れるべきではないが、他方、福祉や教育、その他の慈善事業に宗教が大きな貢献を果たしてきたこともまた確かなのである。ワークショップにおける私の発表では、わが国のさまざまな仏教教団が、とりわけ一九七〇年代後半以降、インドシナ難民支援などの国際貢献に踏み出したことを指摘しておいたが、そこではまた、国内での募金キャンペーンに基づく義捐金の寄付といった支援形態を、いかにして乗り越えていくかという課題についても触れておいた。

池澤夏樹氏が一九九一年に発表された小説『タマリンドの木』には、タイの難民キャンプで働く一人の日本人女性が魅力的に描かれている。その女性、修子にとって、難民たちが普通に暮らせる場所を作るための難民キャンプでの仕事は、毎日の努力の意味を疑う余地のないかけがえのないものである。小説のなかの修子は、宗教とは無関係に描かれているが、宗教が社会に、また世界に貢献しているこうとするときに問われるのは、かけがえのない仕事を見出した、この修子のような人を、それぞれの宗教的理念に立って、いかにして育成できるかということだろう。世界のさまざまな土地で展開されてきたボランティア活動からも、学びうることは多々あるはずである。

中東知的交流セミナー In Search of Dialogue among Religions in the Middle East

2005年3月21日には、南山宗教文化研究所において、国際交流基金中東知的交流セミナーの一環として、In Search of Dialogue among Religions in the Middle Eastを開催した。これはもともと、3月24日から30日に東京で開催の第19回国際宗教学宗教史会議にあわせ、中東諸国からの参加を促すことを目的として企画されたものである。

企画の比較的早い段階で、パリのユネスコ本部に長らく勤務をされていた服部英二氏（“Chargé de mission” to the Executive Office of the Director-General of UNESCO）より基調講演をしていただくことになった。私は服部氏が現在、副会長を務められる国際比較文明学会（International Society for the Comparative Study of Civilizations）での活動を通じ、同氏の知遇を得るようになったが、氏が南山大学のご出身であることを伺い、ぜひとも一度、本学での行事にお招きしたいと考えていた。今

回、基調講演をお引き受けいただいたことで、その願いがかない、たいへんうれしく思っている。

またワークショップ参加者の一人であるHajer Salem氏のご教示により、チュニア映画の上映をワークショップの一環としてプログラムに組み入れることとした。この映画は、第三次中東戦争前夜の、地中海沿岸の街を舞台に、ユダヤ教、キリスト教、イスラームのそれぞれを奉じる市井の人々が接しあう日常生活の様子を、思春期の少女たちの冒険とそれを取り巻く大人たちの様子とともに、軽妙なタッチで風刺的に描き出した佳作である。上映に当たっては、監督Férid Boughédir氏より直接、理解あるご協力を得た。ワークショップにおいては、英語字幕版に加えて、日本語字幕版も上映することとした。この日本語版の上映に際しては、財団法人国際文化交流推進協会（エース・ジャパン）のご協力を得た。

なおこの映画上映について特筆すべきは、出演女優の一人で作品中、個性的な演技が印



象的な Fatma Ben Saidane 氏が、急遽、本ワークショップに参加して下さることになったことである。Saidane 氏は、この時期、東京で開催されていた「東京国際芸術祭 2005 / Tokyo International Arts Festival 205」(NPO 法人アートネットワーク・ジャパン主催)の一公演であるチュニジア演劇のプログラム“Junun-Insanity”(Familia Productions)の上演にあわせて来日されていた。東京到着後休むまもなく、3月18日から20日の公演に出演され、ただちに20日最終の新幹線で名古屋までご足労くださったのである。22日には離日の予定だったため、21日の午後までの短時間の同席ではあったが、ワークショップでの映画上映後、聴衆との質疑応答に熱心に答えてくださったことは、たいへん貴重な機会となった。

ワークショップではこの映画上映ののち、4名のパネリストによる研究発表が続いた。パネリストとその発表テーマは以下の通りである。

Hajer Ben Hadj Salem (Ecole Normale Supérieure de Tunis), “Religious Pluralism in Tunisia”

Camilla Patricia Adang (Tel Aviv University), “Religious Pluralism under Islam, the People of the Book: A Historical Survey”

Ejaz Akram (American University in Cairo), “Christian Missions in Egypt and Their Impact on Coptic-Islamic Relations”

Recep Boztemur (Middle East Technical University, Ankara) “Historical Foundations of Multiculturalism in the Ottoman Empire”

これらそれぞれの発表に対して、Steven Engler (Mount Royal College, Calgary), Yudit Greenberg (Rollins College, Florida), Pakinam

Rachad El Sharkawy (Cairo University), 鷺見朗子(京都ノートルダム女子大学)の各氏にレСПONSを依頼した。また本研究所所長 Paul Swanson、研究所非常勤研究員の金承哲(金城学院大学)の両氏にはセッションごとに司会を務めていただいた。

さらに企画段階より、服部英二氏のご教示により、駐日チュニジア共和国大使 Salah Hannachi 氏、名古屋大学大学院国際開発研究科の中西久枝教授に、Concluding Remarks をご依頼することとした。Hannachi 氏は愛知万博開催直前でもあり要人としての東奔西走の合間に、また中西氏は研究科長という要職でのご多忙の中、ワークショップの締めくくりの役割をお引き受けいただくことができ、まことにありがたく思っている。なおワークショップにおける基調講演、各パネリストの発表草稿については、本研究所のホームページに掲示することになっているので、ご参照いただくと幸いである。

また、来訪者への応対に関しては、本研究所非常勤研究員・平島みさ、研究員・山梨有希子、大谷栄一の各氏のご尽力も得た。心より感謝申し上げたい。

註

1. 海外ボランティアを駆り立てる想像力とは? : 宗教にも問われる国際貢献——国際ワークショップでの議論から——」中日新聞、2004年6月6日朝刊、8面「人生のページ」からの再録。

おくやま・みちあき
本研究所第一種研究員